土浦発

未来への伝承 ⑯

幼稚園開園の鐘

―幼児の健やかな成長を願う―

子どもの健やかな成長は、親はもちろんのこと、多くの大人たちの願いです。そのために大人は何ができるでしょうか。土浦幼稚園にはその参考となるような次の漢詩が刻まれた鐘が伝わります。

（漢詩）

稚児入園　如子慕母
母也能慈　子何肯負
智徳与体　維教育首
助長宜誡　時習可久
進退周還　規矩循守
黽勉従事　啓蒙兀咎
明治十八年八月
竹陰義撰

（意訳）

幼い子どもたちが入園してくる。子どもが母親を慕うように、母親が心をこめて慈しむならば、子どもはどうしてこれにそむくことがあろうか。智育・徳育・体育というのは、教育の根本である。これの速成を望むあまりかえって事を害することをくれぐれも戒めるがよい。教えをくりかえし習うには、長い期間を必要とするものである。教育する者としてのたちいふるまいは、人間としての道をよく守り従い、努力してその職にたずさわり、子どもたちの啓発にあたるならば、大きなあやまちはないであろう。

（『土浦幼稚園創立百周年記念誌』より）

教育を急ぎ過ぎないこと、人間としての道を守り努力をして教育にあたること。これらの心得は、教職員（当時は保姆（ほぼ）といいました）だけでなく、すべての大人のためのものかもしれません。

土浦幼稚園は1885（明治18）年に土浦西小学校（現土浦小学校）の附属幼稚園として開園しました。写真の鐘は小学校の元校長であった進士（しんじ）義道（ぎどう）が漢詩を詠み、開園の際寄付したもので、内側にその名が刻まれています。

鐘の内側
「茨城縣士族進士義道寄附」と文字が刻まれている

当時は小学校もまだ義務教育化してない時期（小学校の尋常（じんじょう）4年・高等4年のうち尋常小学校の4年間が無償になったのは1886年）でしたが、校長坂本祐一郎らが中心となって幼稚園設立の準備が進められました。1885年1月に坂本らは、日本初の幼稚園であった東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）附属幼稚園を視察し、幼児教育の大切さを再認識、準備を重ね8か月後の9月に仮開園、10月に開園式を挙行しました。茨城県で最初の幼稚園は土浦で誕生したのです。今年で創立126年を迎える土浦幼稚園は、1885年以前の開園で現在も続く公立幼稚園としては、全国で10番目の歴史ある幼稚園となりました。

土浦幼稚園が現在まで続いた背景には、幼児教育を大切だと考えた教職員の熱心さやそれを理解し協力した地域の人たちの存在がありました。写真の鐘は、教職員を象徴したものといえそうです。この鐘には園庭の土の中から戦後発見されたというエピソードが残っています（前出『記念誌』）。戦時中の金属回収を避けて埋められたのでしょう。

土浦幼稚園には、一世紀余りの歩みを知ることのできる数多くの教具や遊具も伝わっています。2012年4月からは市立幼稚園の統廃合により所在地を開園当初の大手町から文京町へ移し、いくぶん幼稚園の園舎が新しく土浦幼稚園となります。土浦の幼児教育は、伝統を踏まえつつ新たな歴史をつむぎ始めます。

鐘は9月25日㈰まで博物館2階展示室3でご紹介していますので、ぜひご覧ください。

問 市立博物館（☎824・2928）